

ツアレファテにおいてやもめと出会い、食を備えられ、息子の死からの生き返りの出来事がありました。

1. 主のことばが三年目に (1～6節)

①この地に雨を (1～2) 「それから、かなりたって、三年目に、次のような主のことばがエリヤにあった。『アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよう。』」そこで、エリヤはアハブに会いに出かけた。そのころ、サマリヤではききんがひどかった。」前の17章冒頭には、アハブ王に雨が降らなくなると、エリヤは預言を伝えていました。それから時がたち、主からエリヤに、もう一度アハブ王に会いに行くよう命ぜられます。「この地に雨を降らせよう」という内容を伝えるためでした。エリヤは言われる通りに出発しました。その当時、エリヤのいたフェニキヤ地方以上に、アハブのいたサマリヤ地方では飢饉がひどかったのです。

②オバデヤ (3～4) 「アハブは王宮をつかさどるオバデヤを呼び寄せた。—オバデヤは非常に主を恐れていた。イゼベルが主の預言者たちを殺したとき、オバデヤは百人の預言者を救い出し、五十人ずつほら穴の中にかくまい、パンと水で彼らを養った。」飢饉対策のために、アハブ王は王宮の実務をあずかるオバデヤを呼び出します。このオバデヤは、小預言書の著者とは別の人物です。彼は不信仰のアハブの下にいましたが、信仰の篤い人でした。かつて、アハブ王の妻イゼベルが主の預言者たちを殺害した時に、百人を救い出したのです。50人ずつほら穴にかくまい、彼らに水と食料を供給したということがあったのです。

③草を求め (5～6) 「アハブはオバデヤに言った。『国のうちのすべての水の泉や、すべての川に行ってみよ。たぶん、馬と騾馬とを生かしておく草を見つけて、家畜を殺さないで済むかもしれない。』ふたりはこの国を二分して巡り歩くことにし、アハブはひとりで一つの道を行き、オバデヤはひとりでほかの道を行った。」主なる神に従わないアハブはオバデヤを信頼していました。そして、命令します。国のすべての泉や川に行つて、馬や騾馬を生かしておく草を見つけて来いというのです。アハブ王とオバデヤは二手に分かれ、国の飢饉の実状を調べに出たのです。

2. エリヤとオバデヤの出会い (7～10節)

①エリヤに会い (7～8) 「オバデヤがその道にいたころ、そこへ、エリヤが彼に会いに来た。彼にはそれがエリヤだとわかったので、ひれ伏して言った。『あなたは私の主人エリヤではありませんか。』エリヤは答えた。『そうだ。行って、エリヤがここにいると、あなたの主人に言いなさい。』」さて、エリヤはオバデヤが向かった担当地域へ会い



\*先週の説教で旧約の「生き返りの出来事」はエリシャの働きにもあります。新約にも会堂管理者ヤイロの娘の出来事などがあります。

に出かけました。会ったことがあるかどうかはわかりませんが、オバデヤはそれがエリヤであると察知し、ひれ伏して「私の主人エリヤ様ではありませんか。」と述べます。エリヤは「アハブ王に、エリヤがここにいると告げよ」と告げます。

- ②エリヤへの問い (9)「すると、オバデヤは言った。『私がどんな罪を犯したというので、あなたはこのしもべをアハブの手に渡し、私を殺そうとされるのですか。』」オバデヤは戸惑います。そして問うのです。「私のどんな罪を犯したのですか」。彼はアハブ王を恐れていたのです。不始末があれば、容赦なく殺される可能性があると考えていたからです。「このしもべを」というほどにエリヤにへりくだって助けを請うているのです。
- ③エリヤを捜すアハブ (10)「あなたの神、主は生きておられます。私の主人があなたを捜すために、人をやらなかった民や王国は一つもありません。彼らがあなたはいないと言うと、主人はその王国や民に、あなたが見つからないという誓いをさせるのです。」オバデヤはエリヤに「あなたの神、主は生きておられる」と告白しておきながらも、現実のアハブ王の怖さを述べます。「アハブ王はあなたを捜しています。そのために諸国、部族に人をやって来たのです。そして、あなたがいるかいないかを、その国の人々に誓いを立てさせるほどに血眼になっていたのです。つまり、アハブは、雨が降らない事や飢饉はエリヤに原因があると考えていたのです。」

### 3. オバデヤの訴え (11~15 節)

- ①危惧を伝える (11~12)「今、あなたは『行って、エリヤがここにいると、あなたの主人に言え』と言われます。私があなたから離れて行っている間に、主の霊はあなたを私の知らない所に連れて行くでしょう。私はアハブに知らせに行きますが、彼があなたを見つけことができないなら、彼は私を殺すでしょう。しもべは子供のころから主を恐れています。」オバデヤは、「エリヤがここにいる」とアハブに伝えることはすなわち自分の死につながると言います。つまり、オバデヤがアハブに伝えに行っている合間に、エリヤが神の導きでどこかに連れていかれて、エリヤと会わせられなければ、王の怒りを買うということです。とはいえ、彼は主なる神への信仰を幼き頃より持っているということも伝えます。
- ②オバデヤの証し (13~14)「あなたさまには、イゼベルが主の預言者たちを殺したとき、私のしたことが知らされていないのですか。私は主の預言者百人を五十人ずつほら穴に隠し、パンと水で彼らを養いました。今、あなたは『行って、エリヤがここにいると、あなたの主人に言え』と言われます。彼は私を殺すでしょう。」オバデヤは自分の信仰がエリヤと同じであることを証します。彼にはかつて、王の悪妻イゼベルが多数の預言者を殺害した時に、百人をかくまって彼ら

を養ったことがあったのです。今また、あなたに従い、あなたを守るような行動がわかれば、アハブは自分を殺すに違いありません、というのです。

- ③エリヤの宣言 (15)「するとエリヤは言った。『私が仕えている万軍の主は生きておられます。必ず私は、きょう、彼の前に出ましょう。』」そこまで言われれば、オバデヤに同情するというのも一つでしょう。しかし、エリヤはあくまでも、主の御言葉に立ち、妥協しません。「私が仕えている万軍の主が活着しているのです。」「私は必ずアハブの前に出ます。」

《結論》今朝の聖書箇所には、エリヤとオバデヤという二人の預言者の出会い

が記されています。ここから、三つのことをかんがえていきましょう。

第一に、オバデヤの麗しい点について考えます。彼は、偶像礼拝に進むアハブ王の下で、信仰を失わずに、主なる神を恐れていました。アハブがどうして、彼を近くにおいていたかはわかりかねますが、バアル信仰などに陥っていたとはいえ、ダビデにさかのぼれば、この国は創造主をあがめる信仰に立っていたので、アハブにも後ろめたさがあり、オバデヤを近くにおいていたのかもしれませんが、それも、痛いところはついてこないオバデヤは取り扱いやすかったのかもしれませんが。いずれにせよ、そのような緊張関係の中で、アハブの下で、信仰を持ち続けたオバデヤは忍耐のある信仰者であったと思われる。そして、彼はアハブの妻イゼベルが多くくの預言者殺害に及んだ時にも、百人の預言者を助けました。それは勇気のある行動で、オバデヤしかできないことであったと思われるのです。また、エリヤと出会った時にもひれ伏して迎えている姿を読むにつけても、へりくだった人だと好感を持つのです。

第二に、オバデヤの弱さをみていきましょう。エリヤに対する言動をみる時に、彼の身を守る様子があらわに記されています。エリヤが自分がここにいることをアハブに伝えてもらいたいと願ったことに対して、オバデヤは始終自分の身のことを考えていることがうかがえます。それはエリヤがアハブから目の敵にされていて、もしエリヤが会いたいということを伝えたとしても、結果としてそれが実現しなければ、自分はアハブに殺されてしまうだろうと予測したのです。確かに、アハブがそれほどミスを許容しない王であったことは事実でありましょう。しかし、エリヤの言ったことを、預言者として考えて、神を信じつつ、真っ直ぐに申し出を受け入れることがオバデヤに必要であったのではないかと思われます。確かに、それが自分であったらと考えると、同じように保身に走ってしまうかもしれません。ここから教えられることは、あの百人を救い出した信仰深いオバデヤが保身に走ったように、私たち信仰者一人一人も弱い者達であることを認め

て、主の前に出ていくことであると思われるのです。

第三に、エリヤの信仰です。彼はオバデヤの申し出を理解し、同情しつつも信仰に立ちました。ケリテ川に行く時も、ツアレファテに行った時も、エリヤは主の御言葉に従って行動しました。今回も「アハブに会いに行け。雨を降らせる。」というお言葉を聞いて、彼はそれに従ったのです。そこで、「万軍の主は生きています。私は必ず、アハブの前に出ましょう。」(15 節) とオバデヤに断言したのです。考えてみれば、オバデヤ以上に、エリヤこそアハブの前に出れば殺されてしまう危険性があったのです。しかし、彼は主の御言葉を優先しました。ここにエリヤの信仰から学ぶ点があると思われます。

私たちが歩みをする中で、信仰に立つというのは、具体的には御言葉に従うということなのです。主を仰ぎつつ、御言葉に従うという信仰に立たせていただくではありませんか。しかし、目の前の現実には、従うための高い壁が多々あるでしょう。だからこそ、主にある兄弟姉妹と励まし合いつつ、主を信じる道を進んでいこうではありませんか。